

Interstitial pneumonia with autoimmune features and histologic usual interstitial pneumonia treated with anti-fibrotic versus immunosuppressive therapy

概要

背景

自己免疫的特徴を有し、組織学的に UIP パターンを呈する間質性肺炎(IPAF-UIP)患者における治療戦略は、十分に評価されていない。我々は、IPAF-UIP 患者に対する抗線維化療法と免疫抑制療法の治療効果を比較した。

方法

このレトロスペクティブケースシリーズでは、抗線維化療法または免疫抑制療法を受けた IPAF-UIP 患者を同定した。臨床的特徴、1 年間の治療効果、急性増悪、および生存を調査した。病理学的な炎症細胞浸潤の有無による層別化解析を行った。

結果

抗線維化療法を受けた 27 例と免疫抑制療法を受けた 29 例が組み入れられた。抗線維化療法を受けた患者(27 例中 4 例が改善、12 例が安定、11 例が悪化)と免疫抑制療法を受けた患者(29 例中 16 例が改善、8 例が安定、5 例が悪化)との間で、1 年間の FVC の変化に有意差が認められた($p=0.006$)。1 年間の St George's Respiratory Questionnaire (SGRQ) の変化も、抗線維化療法を受けた患者(27 例中 2 例が改善、10 例が安定、15 例が悪化)と免疫抑制療法を受けた患者(29 例中 14 例が改善、12 例が安定、12 例が悪化)の間で有意差があった($p<0.001$)。生存期間には群間で有意差はなかった ($p=0.32$)。しかし、組織学的に炎症細胞浸潤を認めたサブグループでは、免疫抑制療法を行った方が生存期間が有意に延長した ($p=0.02$)。

結論

IPAF-UIP では、免疫抑制療法は抗線維化療法よりも治療効果の点で優れているようであり、組織学的炎症サブグループではより良好な治療成績が得られた。IPAF-UIP の治療戦略を明らかにするためには、さらなる前向き研究が必要である。